「ナガサキ・ユース代表団」の挑戦

第一期生メンバーによる活動のごく一部を紹介します

2013 Members

ナガサキ・ユース代表団・第1期生
（肩書き、学年は2013年時点のもの）

（写真左から）江島健一（長崎大学医学部医学科６年）、下田杏奈（長崎大学教育学部４年）、橋口優乃（長崎大学経済学部２年）、前川陽香（長崎大学経済学部３年）、胡芳欣（長崎大学経済学研究科・中国山東大学大学院から長崎大学大学院への交換留学生）、斉藤佑布子（長崎大学事務補佐員）、大田祐一朗（長崎大学経済学部３年）、福田翔生（長崎大学経済学部２年）

サリバンさんは「あなたの大切なもの、大事な人、誇りに思うことは何か」と問いかけました。核兵器が使用されれば、このような大切なものがなくなってしまいます。核問題は私たちから遠い問題、国どうし政府どうしの問題ではない、個人ひとりひとりが密接にかかわっている問題であると実感しました。

1 出発前

～ワークショップ「核兵器のない世界を想像してみよう」～

在ニューヨークの軍縮教育家、キャサリン・サリバンさんを迎えての参加型ワークショップを受講。2人ペアやグループでのディスカッション、フィールドワーク、映像やアートを使った多彩なアクティビティを通じ、核問題を新たな視点でとらえる刺激的な1週間でした。

2 ジュネーブでの活動

～政府間会議の傍聴～

午前・午後と行われる本会議場での政府間会議はすべて傍聴可。目の前で繰り広げられる国際議論の臨場感に圧倒されつつ、必死でメモを取っていきます。

日々の新しい発見はユースメンバーそれぞれが毎日ブログで綴っていきます（https://www.facebook.com/nagasakiyouth）。「核兵器の非人道に関する共同声明」をめぐる議論には外交の難しさ、被爆地の思いの届かないもどかしさも痛感しました。

本会議中の「NGO 意見表明セッション」では、市民社会の代表が各国政府を前に意見を述べます。長崎市長や被爆者、若者代表も発言します。若者演説の文案策定にはユースメンバーも協力しました。

本会議場の様子

ナガサキ・ユース代表団の提案で若者演説に以下の一文が入りました。“We have not experienced the same suffering as the Hibakusha, but we can imagine the inhumanity of these nuclear weapons by listening to their testimonies.”（私たちは被爆者と同じ苦しみを経験しているわけではない。しかしその証言を聞くことによって、いかに核兵器が非人道的なものであるかを想像することは十分に可能だ。）」

～ネットワーキング～

準備委員会の場には、100カ国以上の政府や国際機関の関係者だけでなく、核問題に関心を持つ世界各地の人々が集結します。この機会を最大限に活かそうと、ユースメンバーは、最前線で活躍する外交官、専門家、NGO関係者と、多くの意見交換の場をもちました。その中には準備委員会の議長を務めたルーマニアのフェルーツァ大使、ラテンアメリカ・カリブ海核兵器禁止機構（OPANAL）のウベダ事務局長、英アクロニム軍縮外交研究所所長のレベッカ・ジョンソンさん、天野万利軍縮大使（当時）などが含まれます。また、国際赤十字委員会（ICRC）、世界保健機関（WHO）、ジュネーブ安全保障政策センター（GCSP）など在ジュネーブの国際組織も訪問しました。加えて大きな成果は、世界各国から参加した若者たちと出会い、今後に繋がるネットワークを築いたことです。

▲コーネル・フェルーツァ議長（中央）

▲レベッカ・ジョンソンさん（左奥）